

## 日本語の主観的表記頻度に関する研究 オーストラリアの日本語学習者を対象にして(2)

福田幸夫  
(横浜国立大学)

宮崎里司  
(Monash University)

横山詔一  
(国立国語研究所)

日本語は漢字・ひらがな・カタカナなどの複数の表記形態を有している。

これまで日本語の表記形態に関する基礎資料としては119語の日常物品名を対象とした浮田・皆川・杉島・賀集(1991)の「主観的表記頻度」のデータおよび750語の名詞・代名詞を対象とする浮田・皆川・杉島・賀集(1993)の「主観的表記頻度」のデータが知られている。主観的表記頻度とは、ある語が漢字、ひらがな、カタカナのどの表記で目にする人が多いと感じるかを評定したものである。

本研究は、福田・横山(1996)の研究をうけて、母語を日本語としない日本語学習者の「主観的表記頻度」に関する基礎資料を補完することをその目的に計画されたものである。

### 調査1

日本語を母語としない日本語学習者の主観的表記頻度の評価の実施に先立ち、評価対象予定の日本語の familiarity をまず測定した。その理由は、日本語を母語とする学習者については、familiarity に関する既存のデータベースを利用できるものの、日本語を母語としない学習者の場合にはそれに対応するデータベースが存在せず、被調査者が、評価対象予定の日本語についてどのくらい familiarity であるかを事前に確認する必要があるからである。

この問題は、日本国内に在住している留学生を対象に実施した予備調査で指摘された点であった(福田・横山、1996)。また、被調査者の属性の中で、特に日本語の学習時間について統制する必要があることも指摘されており、この点も事前に考慮した。

**材料:** 主観的表記頻度の評価対象として、浮田ら(1991)の日常物品名119語を候補とした。

調査用紙への表記は、「ひらがな」に統一した。「ひらがな」で表記する場合、同音異義語が問題となるため、新明解第4版に基づいてその有無を確認した。同音異義語が存在しない71語と、同音異義語はあっても混乱を生じないと判定した29語の計100語を選定した。

**被調査者:** 被調査者は Monash 大学の日本語学科に在籍している学生であり、日本語の学習時間、さらには日本での生活経験などを考慮して(レベルが同一であるように配慮)50名を選んだ。

**調査用紙:** familiarity の評定には、[ familiar, less familiar, unfamiliar ] の3件法を用いた。

被調査者の個人属性として、性別、母語、日本語の学習時間(授業時間)、日本語を学習した場所の回答を求めた。

**結果と考察:** まず評定結果の全体の傾向を探るために、100語のそれぞれに対する familiarity の評価を2、1、0と得点化し(familiarity の評価した場合は2)その平均値を算出した。平均値が、1.80以上の単語は42個、1.80未満1.50以上の単語は18個、1.50未満1.0以上の単語は22個、1.0未満の単語は18個であった。特に平均値が低い単語としては、「じゅず」、「つみき」、「のこぎり」、「つえ」、「かなづち」、「すいがら」、「まないた」、「ゆのみ」などが該当した。なお、結果の詳細については、福田・宮崎・横山(1997)を参照のこと。

また、被調査者の性別、母語、日本滞在経験別に familiarity の評価に特に大きな変動があるか否かについても検討したが、該当する要因はなく、被調査者全体の結果を使用することが妥当であるとの結論を得た。

## 調査 2

調査 1 で、「familiar」と評価された単語を対象に、その主観的表記頻度を二つ方法で測定する。被調査者については、調査 1 と同じレベルの学習時間を経験した者を対象とした。

材料: 調査 1 における familiarity の平均値が 1.80 以上の 42 単語 (表 1) を選出した。

表 1 主観的表記頻度の測定に使用する単語

たたみ、かばん、てがみ、まど、くすり、きもの、きつぷ まんが、みず、でんわ、めがね、たばこ、しょうゆ、ゆかた、 とけい、しんぶん、ふとん、いす、べんとう、えんぴつ、 くつ、ぼうし、みそ、つくえ、にんぎょう、きって、もち、 さいふ、ふる、さとう、はこ、かぎ、さら、ほん、かべ ちゃわん、なべ、くつした、はかき、しお、どんぶり、ゆびわ
--

表 1 に示された 42 語は、賀集 (1994) による主観的表記頻度に従うと以下のように分類される。

表 2 42 語の表記形態別の分類数

並立	漢	漢優位	漢ひ	ひ	ひ優位	ひカ
13	8	8	10	1	1	1

(漢: 漢字 ひ: ひらかな カ: カタカナ)

被調査者: 調査 1 と同じレベルにある Monash 大学の日本語学科に在籍している学生。

調査用紙: 調査用紙は調査 1 の形式を基本的に踏襲し、[よく見る、見ることもある、まず見ることはない] の 3 件法で評価を求めた。

被調査者の個人属性については、性別、母語、日本語の学習時間 (授業時間) について回答を求めた。

また、調査用紙とほぼ同様の形式で、コンピュータ画面上での回答を求める方法を併用した。これは、調査用紙ではできにくい実験的統制を容易にする目的を持っているが、今後、インターネット上でのデータ収集をはかるテストケースとしての意味合いも持っている。

結果と考察: すべての調査用紙の回収を待って結果の整理を行い、日本語を母語としない日本語学習者の主観的表記頻度の記述するとともに、その結果の背景の分析を進める。また、データベース構築のためにインターネットの活用をはかる諸条件を検討し、次年度の展開をはかる予定である。

## References

- 賀集 1994 日本語の表記形態の標準化とその認知心理学的妥当性の研究 平成 4・5 年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 福田、横山 1996 日本語の主観的表記頻度に関する研究 - オーストラリアの日本語学習者を対象にして (1) - 新プロ「日本語」第 3 回研究報告会予稿集
- 福田、宮崎、横山 1997 日本語で表記された日常物品に対するオーストラリア日本語学習者の familiarity 調査 (執筆中)
- 浮田、皆川、杉島、賀集 1991 日常物品名の表記形態に関する研究 - 各表記の主観的出現頻度と適切性に関する評定 - 人文論及、40 (4)、11-26
- 浮田、皆川、杉島、賀集 1993 日本語の表記形態に関する研究 (1) 日本心理学会第 57 回大会発表論文集、434